

〔論文〕

リサーチとプレゼンテーションを軸にした 異文化理解CLIL英語科目の開発¹⁾

工藤 泰三

名古屋学院大学国際文化学部

要 旨

異文化との接触や文化間の衝突は、社会におけるさまざまな問題の原因となりうる。英語を学習することはそれ自体が異文化との接触であるが、英語圏のそれにとどまらず、世界の多様な文化に接する絶好の機会として捉えることができる。本研究では、異文化理解を目的とし、リサーチとプレゼンテーションの活動を主軸に置き、受講者の英語運用能力の向上に加え、異文化に対する寛容な態度を含めた地球市民意識の向上を目指した英語科目の授業実践を行い、受講者の変容の分析を試みた。その結果、英語運用能力についてはわずかな伸長が見られるのみであったが、地球市民意識については「知識・理解」の категорияでは全体的に、また「技能・スキル」および「姿勢・態度・価値観」の категорияにおいては部分的に向上が認められた。

キーワード：異文化理解, 内容言語統合型学習 (CLIL), グローバル教育, 授業内リサーチ活動, 英語でのプレゼンテーション

Developing a CLIL English course on cross-cultural understanding with an emphasis on research and presentation

Taizo KUDO

Faculty of Intercultural Studies
Nagoya Gakuin University

1) JSPS 科研費 JP16K02859

1. はじめに

グローバル化の進展や内戦、自然災害などさまざまな理由により、世界各地においていろいろな民族が共存するようになるにつれて、互いの文化に対する不十分な理解や不寛容による問題が生じている。日本においては、労働力不足の解消を理由の一つとして2019年4月に新たな在留資格である「特定技能」を設けた改正入国管理法が施行され、2018年10月の時点ですでに約146万人存在する外国人労働者²⁾をさらに増やす政策が進められ、あるいは観光分野においても2018年に3000万人を超えた訪日観光客数を、2020年には4000万人、2030年には6000万人にすることが目標とされ³⁾、日本人が日本国内において今後より多くの外国人と頻繁に接するようになることが容易に予測されるが、その一方で日本人と外国人との間での日常生活や職場におけるトラブル、ヘイトスピーチやヘイトクライムなどは後を絶たない。筆者が教えている学生の中にも外国籍の者が数名いるが、小・中・高等学校において外国籍であるがゆえにいじめられた経験や、住む部屋を借りるのに大家の同意を得にくい現状など、外国籍の住民がさまざまな問題を抱えながら生活している様子を彼らからよく聞く。また海外に目を向ければ、ミャンマーにおけるロヒンギャ族に対する迫害は収まる気配もなく、またChatham Houseが欧州の10か国で行った調査⁴⁾によると、回答者全体の過半数が「イスラム教徒を主とする国からの移民をこれ以上受け入れるべきではない」と回答するなど、他民族への不寛容が世界各地で広がっている。

このような状況を踏まえ、大学を含む各教育機関においては、学生・生徒に対し他文化への理解を深め、互いの持つ差異を認識し、かつその差異を受け入れ、地球市民の一員として国家や文化の壁を越えたパートナーシップの構築に貢献できる人材となるための基礎を培う機会を提供することが肝要である。筆者が所属する名古屋学院大学国際文化学部では、そのディプロマポリシーにおいて「日本および世界の各地域の文化・歴史・社会・政治・経済などを学び、グローバル社会における多文化理解を身につける」「国際社会における文化的対立の構造を理解する」「共生可能な持続的社会的形成のための思考力・判断力・行動力を身につける」「多文化共生社会における豊かな許容性を理解し、共働の精神をもってその実現へ向けての考えを整理し、他者に対して説明することができる」「国際社会の一員として、国際理解学習を進め、国際交流活動に参画することができる」といった能力の育成が謳われており⁵⁾、学部で提供する英語科目においても、その役割を担うべく展開されることが必要である。

2) 厚生労働省 (2018). 『外国人雇用状況』の届出状況まとめ (平成30年10月末現在)]. https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_03337.html. 2019年12月11日参照.

3) 明日の日本を支える観光ビジョン構想会議 (2018). 「明日の日本を支える観光ビジョン—世界が訪れたい日本へ—」. https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kanko_vision/pdf/honbun.pdf. 2019年12月11日参照.

4) Chatham House (2017). What Do Europeans Think About Muslim Immigration? <https://www.chathamhouse.org/expert/comment/what-do-europeans-think-about-muslim-immigration>. Viewed on December 11, 2019.

5) 名古屋学院大学国際文化学部ディプロマポリシー. <https://www.ngu.jp/intercultural/fac-policy/>. 2019年12月11日参照.

2. 異文化理解を主眼に置いた英語科目に求められるもの

日本に住む私たちの多くにとって英語は異文化のものであり、英語を学ぶこと自体が異文化理解につながることは言うまでもないが、英語科目において英語そのものを学ぶことにとどまらず、英語を通して世界に存在するさまざまな文化についての理解を深める機会を提供するには、どのような条件を満たす必要があるのだろうか。

まず、多文化が混ざり合い形成されるヨーロッパとアメリカの文献から、教授内容として求められる要素を検討したい。複言語・複文化主義に基づいて組織されている欧州評議会（Council of Europe）では、その言語教育政策において次の5つの促進を目指している（Council of Europe, 2006）。

- **Plurilingualism**（複言語主義）：すべての人々は、個々のニーズに応じ、生涯にわたっていくつかの言語によるある程度のコミュニケーション能力を高める権利を有する。
- **Linguistic diversity**（言語の多様性）：ヨーロッパは多くの言語を有するが、どの言語も等しく価値を持つコミュニケーションと自己表現の方法である。人々が持つ自身の言語を学び使う権利は欧州評議会協定によって保護されている。
- **Mutual understanding**（相互理解）：他言語を学ぶ機会が与えられることは、文化間コミュニケーションおよび文化間差異の許容のために必須の条件である。
- **Democratic citizenship**（民主的市民性）：多言語社会における民主的社会プロセスへの参加は、個々の複言語能力によって促進される。
- **Social cohesion**（社会的結束）：個人の成長、教育、雇用、移動、情報へのアクセスおよび文化的豊かさを享受する機会の平等は、生涯を通じて言語学習を行う機会に依存する。

(p. 4, 訳は筆者による)

つまり、欧州評議会によると、言語学習はそれ自身を目的として完結するものではなく、さまざまな言語や文化を理解し、その違いを許容しつつ、民主的な社会を形成するために必要なものであるということである。

一方、アメリカ合衆国を本拠とする言語教育関連の諸団体により構成される National Standards in Foreign Language Education Project (NSFLEP) は、言語学習の目標領域を Communication (コミュニケーション)・Cultures (文化)・Connections (つながり)・Comparisons (比較)・Communities (コミュニティ) の5つに分け、そのうち Cultures の項では言語学習における文化学習の必要性について次のように述べている (NSFLEP, 2015)。

(前略) …すべての学習者は、将来遭遇するかもしれないさまざまな文化的・言語的文脈において適切に振舞うために、アメリカ合衆国内外に存在する多様な文化的見地を理解する必要がある。他者の文化が作り上げてきたもの、そしてその存在理由のみならず、その人々の

世界を形成している世界観や慣習，行動様式についても意識を高めることが肝要である。加えて，21世紀における学習者は，それぞれの文化の世界全体に対する貢献，あるいは私たちの地球の他のところで人々が直面している問題や課題に対して他の文化が示しうる解決策について認識しなければならない。

(p. 67, 訳は筆者による)

こちらでも欧州評議会と同様，言語学習においては世界のそれぞれの文化が持つ多様なものの見方，価値観，行動様式，そして知恵について理解を深めることが重要で，ひいてはそのことにより世界が抱える諸課題に対応する力を学習者が身につけることが期待されるということを示している。

次に教授方法について検討する。平成30年告示の高等学校学習指導要領（文部科学省，2018）では，その第8節第1款において，外国語科の学習目標について次のように述べている。

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して，情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 外国語の音声や語彙，表現，文法，言語の働きなどの理解を深めるとともに，これらの知識を，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて，目的や場面，状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けるようにする。

(2) コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，日常的な話題や社会的な話題について，外国語で情報や考えなどの概要や要点，詳細，話し手や書き手の意図などを的確に理解したり，これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりすることができる力を養う。

(3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め，聞き手，読み手，話し手，書き手に配慮しながら，主体的，自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

(p. 163)

このうち教授方法について整理すると，「4技能を統合した学習活動」「情報・考えの状況に応じた的確な理解・表現」「主体的・自律的な外国語使用」というところが要点になろう。具体的には，単に文章を読んで理解する活動にとどまらず，さまざまな情報に触れ，的確に理解し，その理解をもとに他者とともに意見を交換・構築し，自分たちのことばで発表するといった活動を取り入れることが想定できる。

3. 課題の設定

これまでの考察を踏まえ、本研究では授業実践の方針を次のように整理した。なお、授業実践の詳細については後述する。

- ・教授内容：文化の多様性を示すために、あまり受講者になじみがないと思われる国・地域の文化をできるだけ多く扱うこと。また、世界にはさまざまな文化があるが、それぞれに優劣をつけず肯定的に捉えるよう促すこと。
- ・教授方法：学部カリキュラムにおける英語科目デザインに従って内容言語統合型学習（Content and Language Integrated Learning: CLIL）⁶のアプローチを採用し、グループワークを中心に据え、グループ内で協力して必要な情報を収集し（リサーチ）、簡潔にまとめ、その内容を他のグループの受講者に的確に伝える（プレゼンテーション）とともに、自分たちの考えをグループ内で出し合い、それをクラス内で共有すること。

これらの方針に基づいた授業実践を通し、受講者はどのような変容を示すのだろうか。本研究ではリサーチ・クエスチョン（RQ）を次のように設定し、データ収集および分析を試みる。

RQ1：リサーチとプレゼンテーションを軸とした、多様な文化を扱う CLIL 英語授業を行うことにより、学習者の英語運用能力はどのように変化するか。

RQ2：リサーチとプレゼンテーションを軸とした、多様な文化を扱う CLIL 英語授業を行うことにより、学習者の地球市民意識はどのように変化するか。

4. 実践研究

4.1. 研究の対象・方法

上記のリサーチ・クエスチョンを念頭に置き、筆者は自身が勤務する大学の授業の受講者を対象として実践研究を行った。研究対象とした授業の概要は次のとおりである。

- ・実施期間：2019年4月～8月
- ・授業科目名：英語演習C（英語で学ぶ異文化理解）
- ・授業時数：全15回（1コマ90分、うち毎回20分程度は出欠確認・多読活動・リフレクションなどを行ったため、異文化理解学習は各回約70分）
- ・授業担当者：筆者
- ・受講者：大学1年生35名

6) CLILの詳細については渡部・池田・和泉（2011）を参照のこと。

- ・使用テキスト：なし
- ・扱ったテーマ：世界の教育システム・世界の言語・世界の食べ物
- ・授業の手順：それぞれのテーマについて、次のような手順で授業を行った。なお、下記のL・R・S・Wはそれぞれリスニング・リーディング・スピーキング・ライティングの技能を用いる活動であることを示している。
 - 1) 導入：キーワードの定義を英語で考えさせ（S・W）、その後英英辞書に書かれた定義を確認する（R）とともに、フォトランゲージやクイズなどでテーマへの関心を高める（L・R）。
 - 2) リサーチ：受講者は自身のPCまたはスマートフォンを用いて、テーマに関して割り当てられた国の情報を収集し（R）、ワークシート（資料1参照）に整理して記入する（W）。グループ分けはトランプのカードを配布し、同じ番号の者同士（1グループ4名を基本とする）で組ませる。情報収集の際は受講者が持つカードのスイート（ハート・スペード・ダイヤモンド・クラブ）それぞれに集める情報の種類を割り当て、各自が集めた情報を1つのワークシートに記入することで、その国の情報をまとめさせる。
 - 3) プレゼンテーション：ワークシートに書かれた情報を参照しながら、各グループがリサーチ内容について、スクリーンに提示されたテンプレートを参考にしながら、クラス全体に対して英語でプレゼンテーションを行う（S）。他のグループの受講者はそれを聞きながら、ワークシートの裏面にあるメモ欄にメモを取る（L）。
 - 4) ディスカッション：ワークシートに書いたメモを参照しながら、どのような発見があるか、あるいはどのようなことが言えるかを話し合いワークシートに記入する（W）。それをクラス内で回し読みし、意見を共有しながら「これはいい」「これは思いつかなかった」など感動を覚えたものについては星印をつけるなどして肯定的評価を与える（R）。

また、学習者の変容についてのデータ収集および分析は、工藤（2019）と同様に下記の方法で行った。

- ・英語運用能力の変化：教育測定研究所が提供している英語コミュニケーション能力判定テストCASECを5月と12月に実施し、両スコアを比較する。
- ・地球市民意識の変化：石森（2013）の質問紙を用い、第1回の授業と第15回の授業においてアンケート調査を実施し、両スコアを比較する。

4.2. 結果の分析

4.2.1. CASECスコアの推移

英語運用能力の変化をCASECのスコアデータから検討する。当該科目受講者と非受講者のうち、5月実施分（Pre）と12月実施分（Post）の双方を受験した者のCASECスコアの変化を対応のあるt検定によって比較してみると、表1のような結果が得られた。

表1 CASEC データの変化

群	受験者数	Pre/Post	<i>M</i>	<i>SD</i>	Post <i>M</i> – Pre <i>M</i>	<i>p</i>	<i>d</i>
英語演習C 受講者	24	Pre	422.92	115.43	8.96	.493	.08
		Post	431.88	116.92			
英語演習C 非受講者	111	Pre	421.97	116.10	6.27	.242	.05
		Post	428.24	114.81			

両群のスコアを比較すると、両群とも平均点が上昇しており、英語演習C受講者の平均点は8.96点、非受講者の平均点は6.27点の上昇が見られ、わずかながら受講者群の方が平均点の上昇が大きかったが、ともに統計上有意な差とは言えなかった。また、効果量についても両者ともほとんど認められなかった。

4.2.2. 地球市民意識の変化の分析

次に、当該科目受講者を対象とし、石森（2013）の質問紙を用いて第1回の授業時（Pre）と第15回の授業時（Post）に実施したアンケートの回答内容を資料とし、ウィルコクソン符号付順位検定を用いて受講者の地球市民意識の変化を分析したところ、表2に示す結果を得た。なお、Post実施の際に指示が徹底せず回答者が少なかったこともあり、PreとPostの双方に回答した受講者の数は12名と限定的であった。

結果を概観すると、大きなカテゴリー3つのうち「知識・理解」のカテゴリーで特に顕著な意識の向上が見られた。他の2つのカテゴリーについては、全体的には意識の向上が見られるものの、質問項目によってその差にはばらつきが見られる。「技能・スキル」のカテゴリーにおいては、10項目中統計上有意な差が認められたものは1項目、そして効果量大と認められる項目（ $r \geq .50$ ）は4項目となっている。また「姿勢・態度・価値観」のカテゴリーに含まれる10項目においては、統計上有意な差が認められたものは3項目、そして効果量大と認められる項目は4項目であった。

5. まとめと考察

本論では、言語学習における異文化理解の位置づけ、そして異文化理解を主眼に置いた英語科目に求められるものについて文献を参照しながら考察したうえで、異文化理解をテーマとしたCLIL英語科目の実践を行い、受講者の英語力および地球市民意識の変容について分析を試みた。

まずRQ1「リサーチとプレゼンテーションを軸とした、多様な文化を扱う英語科目の授業を行うことにより、学習者の英語運用能力はどのように変化するか」については、CASECスコアの変化を分析したところ、当該科目の非受講者に比べて受講者のスコアの方が若干大きい幅の上昇が見られたものの、明らかに当該授業が英語運用能力の伸長に貢献したと言えるデータは得られ

表2 地球市民意識データの変化 (n = 12)

カテゴリー	質問	Post - Pre		
		Z	p	r
知識・理解	1 人権・環境・平和・持続可能な開発等について用語の意味を理解している	-2.313	.021*	.67
	2 人権・環境・平和・持続可能な開発等について主な問題を例に出して簡単に説明ができる	-2.530	.011*	.73
	3 グローバルな課題が複雑に絡み合っていることを知っており、何か例を出して説明できる	-2.088	.037*	.60
	4 地球的課題の解決のためのさまざまな取り組みや活動について知っている	-2.484	.020*	.72
	5 自分と人々との共通点・相違点に関心を持ち、それらを見出すことができる	-2.264	.024*	.65
	6 地域・国・世界の多様性（文化・価値観・信条・アイデンティティ等）を認識できる	-2.192	.049*	.63
	7 さまざまな文化を持つ人が暮らす社会（多文化社会）の現状を把握し、共に生きるための課題を理解している	-2.300	.019*	.66
	8 世界の国々の目に見えないつながりを意識し、グローバル社会の現状の例を挙げることができる	-1.580	.097	.46
	9 いろいろな分野でのグローバル化社会の功罪（よい面・悪い面）を述べるができる	-1.834	.177	.53
	10 世界の問題を身近な事柄と結びつけて具体的に考えることができる	-2.089	.030*	.60
批判的思考・問題解決	11 他者の意見に耳を傾け、それらに対する自らの意見をまとめ、表現できる	-0.889	.275	.26
	12 偏見や固定観念を自覚し、冷静な判断ができる	-1.589	.159	.46
	13 一つの事柄に対し、肯定側・否定側などいろいろな側面から考えることができる	-1.781	.098	.51
	14 自分の考えを（言語を含めた）様々な方法で表現することができる	-1.733	.060	.50
	15 自分が学んだことや意見を効果的に伝えること（プレゼンテーション）ができる	-1.749	.082	.51
	16 全体の中での自らの役割を認識し、他者と協力しながら課題に取り組むことができる	-1.121	.262	.32
	17 異なる意見に出会っても、それを聞いて自らの考えを再構築し、合意することができる	-0.604	.546	.17
情報収集・活用	18 情報にアクセスし必要な情報を収集し、それを目的の達成のために活用することができる	-1.040	.298	.30
	19 課題解決のためのテーマやプロジェクトを設定し、自ら調べ分析できる	-1.623	.103	.47
	20 メディアや与えられた情報を冷静に見て判断する目を持つことができる	-2.271	.036*	.66
	21 自らの長所・短所を理解し、よい点を伸ばそうとする	-2.439	.018*	.70
姿勢・態度・価値観	22 自分自身を大切に思い、自分自身の生き方を探することができる	-1.136	.204	.33
	23 困っている人々の問題を自分の問題に置き換えて、真剣に考えることができる	-1.371	.170	.40
	24 考えや意見、タイプの異なる周囲の人とも協力するよう努力できる	-0.829	.407	.24
	25 自分の心に壁を作らず、社会的状況・家庭環境・民族・宗教等が異なる人ともコミュニケーションできる	-0.711	.477	.21
	26 オープンマインドを持ち、さまざまな違いを認め、その違いを肯定的に受け止めることができる	-2.248	.040*	.65
	27 地球規模の問題を自覚し、自分の生活（ライフスタイル）を見直すことができる	-1.576	.137	.46
地球市民の自覚と責任、行動への意欲	28 身近なプロジェクトや活動の計画、話し合いに積極的に参加できる	-0.060	.809	.02
	29 学んだことを周りに伝えたり発表したりし、計画実行のために他者と協力して行動できる	-2.183	.029*	.63
	30 より良い未来をイメージし、それに対してすべきことを考え、実行できる	-1.765	.068	.51

*p < .05

なかった。

この結果が示唆する課題として、より一層の英語運用能力の向上を期待するためには、授業者の口頭での講義や、スライドやインフォグラフィックスなどのビジュアル資料に加え、より多くのまとまりのある文字資料を導入するなどによってインプットを充実させること、リサーチの際により多くの量・種類の英語資料にアクセスするよう学習者に促すこと、そしてプレゼンテーションで用いた英語表現をより確実に習得できるよう表現集を配布することなどが考えられる。

次にRQ2「リサーチとプレゼンテーションを軸とした、多様な文化を扱う英語科目の授業を行うことにより、学習者の地球市民意識はどのように変化するか」については、全面的にとまでは言えないまでも、部分的に明らかな向上が見られた。特に明らかな向上が見られたカテゴリーは「知識・理解」で、10項目中8項目で統計上有意味な差をもって向上が見られ、9項目で効果量大と認められた。これは授業において受講者たちがこれまで知らなかった世界のさまざまな事象に触れ、その多様性への意識を高めることができたことに起因するものであろう。「技能・スキル」のカテゴリーにおいては、表現および情報判断に関する項目で向上が見られる。これは、まずリサーチ活動の中でいくつかの情報に接した時に「どの情報が正しいのか」を考える機会があったこと、そしてこれまでの英語学習活動で多くの学生が経験してこなかったであろうプレゼンテーション活動を経験したことなどが影響しているものと考えられる。そして「姿勢・態度・価値観」のカテゴリーでは、自己理解・他者との違いの許容・他者との協働といった項目で明確な向上が見られた。他者との協働についてはグループでのリサーチ・プレゼンテーション活動が功を奏していると思われるが、自己理解・違いの許容については、世界の多様な文化的側面に触れることで、自身が当たり前だと思っていたことが当たり前ではなく、むしろ世界的に見ると特徴的・個性的な側面を自身が持っていることを認識し、そしてそれが世界中のそれぞれの人々にあてはまることであり、「違うことが当たり前」という意識を持つに至ったことがその向上の要因となったのかもしれない。ただしこの点を明らかにするためには、授業リフレクションの分析や受講者インタビューなど、さらに詳しい分析が必要であろう。

一方、意識の向上の幅が小さかったものを見てみると、質問11「他者の意見に耳を傾け、それらに対する自らの意見をまとめ、表現できる」、質問17「異なる意見に出会っても、それを聞いて自らの考えを再構築し、合意することができる」、質問24「考えや意見、タイプの異なる周囲の人とも協力するよう努力できる」、質問28「身近なプロジェクトや活動の計画、話し合いに積極的に参加できる」など、他者との話し合いを通して意見を構築したり、新たなものを創造したりするスキルや姿勢に関する項目が目立つ。今回の授業実践では主に世界の多様な文化的側面に触れることを中心に扱ったため、自分たちが発見した、あるいは関心を抱いた事象に対し深く考察するような活動は取り入れなかったが、今後はそのような活動、例えば「ムスリム女性が日本の国会議員になった場合、ヒジャブの着用は認められるべきか」など、ある文化と異文化の接触により生じる課題について意見交換を行ったり、エッセイを書いたりする活動を取り入れることにより、今回大きな向上が見られなかったスキル・姿勢についても一層の改善が期待できるかもしれない。

他にも使用教材, 教材の提示方法, グループの作り方, 自習課題の与え方, 語彙・文法等の言語面の指導方法など, 細かく見れば多くの改善点が指摘できるだろう。本研究で得られた知見・課題点を参考にしながら, 今後も多様な文化に対して寛容に振舞い, 人々がより平和に暮らせる社会づくりに貢献できる人材の育成に力を注いでいきたい。

謝辞

本研究はJSPS科研費 JP16K02859の助成を受けたものである。また, 本研究に協力してくれた名古屋学院大学国際文化学部の学生諸君にこの場を借りて感謝を申し上げる。

参考文献

- 石森広美 (2013). 『グローバル教育の授業設計とアセスメント』東京: 学事出版.
- 工藤泰三 (2019). グローバル・シティズンシップの涵養を目指したCLIL授業実践による学習者の変容についての考察. 中部地区英語教育学会『紀要48』, 263-270.
- 文部科学省 (2018). 高等学校学習指導要領 (平成30年告示).
- 渡部良典・池田真・和泉伸一 (2011). 『CLIL (内容言語統合型学習) 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第1巻 原理と方法』. 東京: 上智大学出版.
- Council of Europe (2006). *Plurilingual Education in Europe: 50 Years of international co-operation*. Strasbourg: Council of Europe.
- National Standards in Foreign Language Education Project (2015). *World-Readiness Standards for Learning Languages*. Alexandria, VA: American Council on the Teaching of Foreign Languages (ACTFL).

資料1 リサーチ・プレゼンテーション用ワークシートの例

英語演習 C (工藤) 2019
Worksheet 3-3



Do research on the language you have chosen.

Name of the language: _____

<Data>

<p>♡ (Geography)</p> <p>Countries where the language is spoken: _____ _____</p> <p>Number of speakers: _____</p>	<p>♣ (Phonology)</p> <p>Number of vowels: _____</p> <p>Number of consonants: _____</p>
<p>◇ (Grammar and writing system)</p> <p>Word order: SOV / SVO / VSO / Other ()</p> <p>Writing system (letters): _____</p>	<p>♣ (Greetings)</p> <p>Word for "Hello" in the language: _____</p> <p>Word for "Thank you" in the language: _____</p>

Group:

♡ :	♣ :	◇ :	♣ :
-----	-----	-----	-----

Comparison table

(Note-taker) Language	Japanese	(○)	(○)	(★)	(★)	(○)	(○)	(★)	(★)
Countries where the language is spoken	Japan								
Number of native speakers	128 million								
Word order	SOV								
Letters (Writing system(s))	kanji, hiragana, katakana								
Number of vowels	5								
Number of consonants	16								
"Hello" (alphabet or katakana)	konnichiwa								
"Thank you" (alphabet or katakana)	arigato								

<Discussion: What can you find from these data?>